

## 「1デナリオン」

2014年05月01日

私は、マタイによる福音書 20 章 1 節～16 節の「ぶどう園の労働者のたとえ」が大好きだ。主イエスは、このたとえで「どんな人も生きよ」と神に命が保障されていることを語っている。

ぶどう園の主人が労働者を雇うために夜明けに出かけた。労働者に 1 日につき 1 デナリオンの賃金の約束をして雇った。1 デナリオンは当時、1 家族 1 日の生活費であった。そして、9 時、12 時、午後の 3 時にも「ぶどう園に行きなさい。ふさわしい賃金を払ってやろう」と言って、雇った。午後 5 時に行ってみると、まだ労働者がいた。「なぜ、何もしないで、一日中ここに立っているのか」と問うと「だれも雇ってくれないのです」と答えた。彼らもぶどう園に送り、働かせた。1 日の仕事が終わり賃金を払う時、午後 5 時、午後 3 時、12 時、9 時、朝早くにと雇った順を逆に並ばせ、皆同じく 1 デナリオンを払った。朝から夕方まで働いた者は、主人に「最後に来たこの連中は、一時間しか働きませんでした。まる一日、暑い中を辛抱して働いたわたしたちと、この連中とを同じ扱いにするとはい」と不平を言った。当然であろう。しかし、主人は、契約違反はしていない、最後の者にも支払ってやりたいと答えている。どんな社会体制でも、労働の量と質に応じて、賃金が支払われるのが常識である。このたとえは理解しにくい。

私は、このたとえに深い思い出がある。奉仕していた教会に盲婦人がおられた。子どもの頃、はしかの菌が目に入り、盲目になられたと聞いた。自立するため「浄瑠璃」を習得し、三味線を弾いて教える仕事に就いた。しかし、浄瑠璃を習う人がいなくなり、仕事ができず、生活保護を受けていた。彼女の家で丸いちゃぶ台を囲み、3 人集まる家庭集会をしていた。ある日、与えられた「ぶどう園の労働者のたとえ」の聖句を、私はゆっくり読んだ。そして、「どう思いますか」と聞いた。すると彼女は、即座に「イエスさま、ありがたいと思います」と答えた。朝から働いた人は、辛い労働であったが、1 デナリオンをもらい、家族一緒に食事できるという安心感があった。午後 5 時に雇われた人は、この時間まで雇ってくれる人を待ったのである。朝から午後 5 時まで、どれほど不安が襲っただろうか。午後 5 時にもなれば、もう絶望である。今日は、水を飲んで寝るしかないと思ったであろう。彼女は、待ち続けた労働者の不安をよく知って「イエスさま、ありがたいと思います」と言ったのである。

聖書は、どこに立って読むかによって、全く違う視点が見えてくる。主イエスは、神の国では平等であるというような抽象的な話をしたのではなく、人は皆この世で、正當に生きる権利があるとたとえたのである。お金と隣人がなく、餓死者が出ている今日、主イエスのたとえの実現に向かっていくことが、人間であることの証である。